

唐代の動物寓話

— 中国寓話史における韓愈の再評価 —

渡辺 志津 夫

はじめに

中国古代の寓話（中国語で「寓言」）は、先秦時代に最盛期を迎え、魏晉南北朝期にいったん低調になるが、中唐に至って再び盛んに作られるようになる、という大きな流れをたどる。先秦寓話の主な担い手は諸子百家と呼ばれる人々であり、唐代では柳宗元が数多くの寓話を書いた。

柳宗元の寓話は、唐代寓話の代表作と言われる「三戒」をはじめとして、動物を題材とするものが多数を占める。

唐代の動物寓話は、どのような変遷を経て、柳宗元に結実したのだろうか。従来の研究では、柳宗元の動物寓話に関する論考や指摘は数多く見られるが、それ以前の動物寓話に関する検証は十分に行なわれていない。柳宗元以前の動物寓話の特徴を明らかにすることによって、柳宗元の動物寓話の位置づけも、より明確になるのではないだろうか。

また、唐代古文運動のもう一方の雄であり、「韓柳」と並び称される韓愈は、寓話史では高い評価を受けていないが、その評価は正しいのだろうか。

本論では、はじめに韓愈より前の唐代動物寓話を取り上げ、その全体像を示すとともに、先秦の動物寓話との比較を通して、その特徴を明らかにする。このような作業は今まで行なわれたことがなく、また選択基準をやや広くしたため、寓話史で初めて取り上げられる作品が多くなっている。

次に柳宗元の動物寓話について検討し、その特徴を確認するとともに、それ以前の動物寓話との比較を行い、両者の共通点・相違点を明らかにする。

最後に、韓愈の作品から、寓話史において従来評価されることのなかった作品を取り上げ、実は韓愈こそが柳宗元の動物寓話を生み出す起爆剤となっていることを確認し、中国寓話史における韓愈の再評価を試みたい。

一 韓愈より前の動物寓話

韓愈より前の動物寓話は、先行研究では取り上げられる作品が少ない上に、取り上げる作品にばらつきがあり、この時期の動物寓話の全体像を知ることができない。

本論では選択基準をやや広げ、「異類が人間と同じ感情・性質を持つものとして描かれており、寓意が託されている作品」とし、『全唐文』をテキストとして、該当する作品を抜き出した。作品の一部が該当するものも寓話と見なしたため、従来よりも作品数が多くなっている。

今回の調査では、十七篇の動物寓話が見つかった（三篇の罔両を扱ったものを含む）。それぞれの作品の作者・作品名・巻数は次の通りである。

1. 王績 「蛇銜珠報隋侯賛」（卷一三二）
 2. 王績 「無心子伝」（卷一三二）
 3. 盧照隣 「窮魚賦」（卷一六六）
 4. 裴炎 「猩猩銘」（卷一六八）
 5. 東方虬 「尺蠖賦」（卷二〇八）
 6. 東方虬 「蚯蚓賦」（卷二〇八）
 7. 李邕 「鵲賦」（卷二六一）
 8. 高邁 「鯢化為鵬賦」（卷二七六）
 9. 李華 「鶚執狐記」（卷三二六）
 10. 李白 「大鵬賦」（卷三四七）
 11. 郝昂 「蚌鷸相持賦」（卷三六一）
 12. 包佶 「罔両賦」（卷三七〇）
- 以道德希夷仁義為韻

13. 元結 「虎蛇頌」（卷三八〇）
 14. 蔣至 「罔両賦」（卷四〇七）
 15. 孫鑒 「罔両賦」（卷四三四）
 16. 李子卿 「紅紫烏賦」（卷四五四）
 17. 陸贄 「鴻漸賦」（卷四六〇）
- 以鴻漸路適之為韻

これらの作品について、先秦寓話との比較を交えながら、題名・文体・構成と内容の面から、その特徴についてまとめてみる。

題名については、賦で書かれた作品が多いことが指摘できる。動物の賦を作ることは、『文選』に「鶚鵲賦」、「鷦鷯賦」等が見えるように、珍しいことではない。先秦時代は賦という文体の成立前であり、この点について先秦寓話との比較はできないが、韓愈より前の動物寓話が賦の中に多く見られることは、今回明らかになった点の一つである。

作品に取り上げられている動物について見ると、紅紫鳥以外はすべて過去の書物に出所を求めることができる。たとえば「蛇銜珠報隋侯賛」は、『淮南子』覽冥訓の高誘注に見える次の故事をふまえる。

隋侯、漢東之國、姬姓諸侯也。隋侯見大蛇傷斷、以藥傅之。後蛇于江中銜大珠以報之。因曰隋侯之珠。蓋明月珠也。」（隋侯は、漢東の國、姬姓の諸侯なり。隋侯 大蛇の傷斷するを見て、藥を以て之を傅く。

後に蛇江中より大珠を銜みて以て之に報ゆ。因りて隋侯の珠と曰ふ。蓋し明月珠なり。」

他の作品では、「無心子伝」には野に放たれて寿命を全うした馬の寓話が見え、『莊子』馬蹄篇を想起させる。窮魚は『莊子』外物篇の、轍の水たまりに取り残されたフナの話をつまみ、猩猩は『礼記』曲礼上に「猩猩能言、不離禽獸。」（猩猩は能く言へども、禽獸を離れず）と見える。

尺蠖（シヤクトリ虫）は、『周易』繫辭下伝に「尺蠖之屈、以求信也。」（尺蠖の屈するは、以て信びんことを求むるなり）とあり、蚯蚓は、『礼記』月令に「蚯蚓出。」（蚯蚓出づ）と、その生態が述べられている。「尺蠖賦」は『周易』の記述を引用し、「蚯蚓賦」は蚯蚓の生態をふまえて、文章を展開させている。

虎蛇は、両者がセットで登場する例は見られないが、『戦国策』楚策一に「虎の威を借る狐」の話があり、『韓非子』説林上には、蛇どうしが相談し、互いに協力して窮地を脱する話がある。

こうしてみると、韓愈より前の動物寓話は、動物に寓意を託す時に、古くからあった題材を選んでいることが分かる。これは、作者と読者が容易にイメージを共有できるといふメリットがあるが、新鮮さに欠ける一面もあることは否めない。

先秦寓話の題材は、（１）歴史上または神話伝説上の人

や神、（２）名もなき庶民、（３）動植物・器物、に大別され、中でも（１）を題材とするものが圧倒的に多く、（３）は非常に少ない。これに対し唐代の寓話は、総数が先秦寓話と較べて非常に少ないけれども、（１）のタイプの寓話がほとんど見られなくなり、（２）と（３）が多数を占めている。

次に文体について検討する。題名を「○○賦」とする作品は、当然対句を主体とする。題名に「賦」がつかない「蛇銜珠報隋侯賛」、「鶚執狐記」、「虎蛇頌」も、その文章は四字句や対句を主体としている。したがって、韓愈より前の動物寓話で、散文で書かれているものは、「無心子伝」、「猩猩銘」の二篇のみということになる。先秦寓話は、もちろん散文で書かれていた。それが六朝時代を経て唐代に至ると、動物寓話が散文で書かれることはほとんどなくなっていたことになる。

続いて構成と内容について検討する。構成については、まず先秦寓話の二つの「型」を確認し、それとの比較を通じて考察を進めるとわかりやすいと思う。

先秦寓話の構成は、大きく二つのタイプに分けられる。

その一は、作中人物がもう一人の作中人物を説得する際に寓話を利用するもので、寓話は説得する側の発話の中に現れる。寓話を含む発話の前後には、場面の説明、相手の発話、相手の反応、寓意、第三者の評語などが書かれる。『戦国策』に見える、縦横家が国王を説得する話はその典型である。ここでは仮に、これを『戦国策』型

と呼ぶ。

『戦国策』型寓話では、寓話の切り出し方にも二種類ある。一つは、「王様は……についてお聞きになったことはございませんか」と前置きして、寓話を語り始めるもの。もう一つは、「私がここに来る途中で、こんな光景を目にしました」と前置きして、寓話を語り始めるもの。ここでは荒唐無稽な話が排除されず、いかにおもしろい話で相手を説得するかが焦点になり、発話者の腕の見せ所になっている。

その二は、とくに登場人物を設定することなく、寓話のみを載せるもので、『莊子』逍遙遊篇の、鵬が北溟に向かって飛翔し、それを蜩や学鳩が笑う話や、『韓非子』説林下篇に見える、はじめは互いに争っていた三匹のシラミが、ひとたび利害が一致するや、力を合わせて生き残りを図る話がこれにあたる。ここでは仮に、これを『莊子』型と呼ぶ。

以上をふまえて、韓愈より前の動物寓話を検討すると、典型的な寓話といえるのは、『無心子伝』、『窮魚賦』、『猩猩銘』の三篇である。よってはじめにこれらの作品について検討する。

「無心子伝」には序があり、そこで制作の動機が述べられている。作者の王績は官を辞して郷里に戻ったが、自分をそしめる人があつたので、「無心子」を書いて真意を示すのだ、という。

伝の本文は、まず越王から退けられた無心子が王績の

住む村を訪れ、そこで機士と会う、という場面設定がなされ、無心子と機士が会話し、無心子が、有能なために酷使されて早死にした馬と、無能なためにかえって寿命を全うした馬の故事を述べ、「無用の用」の境地を述べて自らを無能な馬になぞらえ、それを聞いた東臯子が絶賛する、というあらすじである。

無心子は、馬の寓話を述べる際に、「爾聞蜚廉氏之馬說乎。」（爾蜚廉氏の馬の説を聞けるか）と前置きしてから寓話を語り始める。場面の設定、登場人物同士の会話、寓話を引用するときの前置き、第三者の評語という、典型的な『戦国策』型寓話になっている。しかし、先行研究の中で、この作品に言及したものは全く無い。

次の「窮魚賦」も、はじめに制作動機を述べた序が付されている。自分がもめ事に巻き込まれ、厳しく追及されそうになったときに、友人に助けられた。その恩を忘れないために「窮魚賦」を作ったという。

賦の本文は、東海の波臣である巨大な魚が、漁師とその仲間を追いつめられて進退窮まったところを、大鵬が救ってくれたので、漁師たちはなすすべもない、という。自分を魚に、友人を大鵬に例えていることは明らかである。

東海の波臣が進退窮まる話と、漁師が巨魚を釣り上げる話は、ともに『莊子』外物篇に見え、鯢が大鵬に変化する話は逍遙遊篇をふまえ、魚が「江海に相ひ忘る」る話は大宗師篇に見える。このように、この作品は『莊子』

の典故を組み合わせて構成されており、本文全体も、『莊子』型寓話になっている。今回参照した先行研究では、『中国雑文史』だけが「寓言形式の雑文」としてこの作品を引用している。しかし同書は、本章の冒頭に挙げた本篇以外の動物寓話には言及していない。

続いて「猩猩銘」について検討する。猩猩は猿に似た動物で、『礼記』曲礼上、『山海經』海内經などに見える。人のことばを理解し、酒を好んだという。本文では、はじめに『水経注』と『淮南子』から、猩猩の記述を引用する。

続いて、猩猩は酒を好んだために、人間が仕掛けた罠にかかり、群ごと捕らえられ、さらに見苦しい行ないをするに至る、という一連の話の後に、座の客が「何と愚かな獣だろう」と嘆息すると、そばにいた僧侶が、人間も猩猩と同じように愚かであり、猩猩を笑えないのではないか、と教訓（すなわち寓意）を述べて座の人々を戒め、客たちがそれを称賛し、四字八句の銘で終わる。これも『戦国策』型寓話と見なしていいだろう。今回参照した先行研究の中では、『中国雑文史』だけがこの作品に言及しているが、やはり本篇以外の十六篇には言及していない。

動物寓話において、異類どうしが会話する例は少なくない。この作品は、猩猩と人間が直接会話するくだりがあり、それ自体はたいへん異色なのだが、猩猩はもともとと人間のことばを解すると考えられていたので、読み手

はそれほど違和感を覚えなかったと思う。これに対し『莊子』外物篇には、轍の水たまりに取り残されたフナと莊子が直接会話する話がある。ふつう異類と人間が会話するには、夢の中のような特別な場を設定する必要がある、異類と人間が直接会話するのは、先秦・唐の寓話の中でこの一例しか見られない。他の寓話と一線を画するものであり、莊子のとらわれない精神が十分に發揮されていると思う。

ここに取り上げた三篇の作品は、どれも寓話としての内容を十分に備えている。唐代の寓話を考える上で不可欠の作品といえるが、上述したように、これらの作品をすべて取り上げるのは、本論が初めてである。

残りの作品について概観すると、賦という文体の性格上、対象をさまざまな角度から描写していく中に、寓意を込めた表現がときおり見られる、という形が多い。先に検討した作品と比べて、それらはどれも寓意が弱く、メッセージが直接伝わってこない。これは、本文の中で寓話とそれ以外の部分が明確に分かれていないこと、作品の大部分が寓意でも主張でもなく、単に対象を描写する記述であること、などが理由として考えられる。たとえば『鵲賦』では、ハヤブサの優れた資質をさまざまな角度から描写する中に、鳩を捕らえ、殺さずに鳩の体温で暖を取り、一晚中仁の心を持ち続け、翌朝に鳩を放してやる、という寓話が挿入されていたり、「至徳を備えているので感情を抑制し、いつも相談して争わない」と、

ハヤブサが人間と同じ性質を持っているかのような表現が見られる。しかし、このような表現は文中に散見されるだけで、量も少ないし、まとまって記述されているわけでもない。対象をさまざまな角度から描写すると、どうしても起伏が乏しくなり、ときおり寓意を込めた表現を交えるに止まってしまう。これに対し、先に挙げた「窮魚賦」は、事態の経過という、時間の経過を作品に取り込むことによってストーリーに流れが生まれ、作品全体が寓話として成り立っている。

次に、すでに検討した三篇を含め、今回取り上げたすべての作品の寓意と、カッコ内にそれらがふまえたと思われる作品を挙げ、韓愈より前の唐代動物寓話の全体像を示す。

1. 王績「蛇銜珠報隋侯贊」(卷一三三)

蛇が人に恩返しをした話を引き、蛇も人の恩を解することを述べ、最後に「此猶知報、而況吾人。」(此れ猶ほ報ゆるを知る、而るを況や吾人をや)と寓意を述べる。『淮南子』覽冥訓高誘注)

2. 王績「無心子伝」(卷一三三)

無心子が機士に対して、有能なために酷使されて早死にした馬と、無能なためにかえって寿命を全うした馬の故事を述べて、「無用の用」の境地を述べる。序に「退著『無心子』、以見趣焉。」(退きて「無心子」を著し、以て趣を見ず)とあるように、王績が無心子に託し

て自らの心情を表した作品。『莊子』馬蹄篇)

3. 盧照隣「窮魚賦」(卷一六六)

自分自身を窮魚(進退窮まった魚)に、友人を大鵬に例えて、窮地を救ってくれたことに對する感謝を述べる。序に制作の動機が述べられ、賦は全編が寓話である。『莊子』外物篇等)

4. 裴炎「猩猩銘」(卷一六八)

猩猩という動物の愚かな振る舞いの話のあとで、僧侶が、人間も猩猩と同じように愚かなのではないかと、と座の人々を戒める。『礼記』曲礼上等)

5. 東方虬「尺蠖賦」(卷二〇八)

尺取り虫の振る舞いを、まるで知恵者のようだという。最後に「況不才之下士、敢求伸以自矜。」(況や不才の下士、敢へて伸びて以て自ら矜ることを求めんや)と述べ、その身体的特徴を借りて、自らの身の処し方を戒める。『周易』繫辭下伝)

6. 東方虬「蚯蚓賦」(卷二〇八)

ミミズが天から与えられた持ち前のままに生き、何の欲望も持たず、そのために自己を全うできることを称賛する。『礼記』月令等)

7. 李邕「鵲賦」(卷二六一)

ハヤブサの優れた資質をさまざまな角度から描写する中に、鳩を捕らえ、殺さずに鳩の体温で暖を取り、一晚中仁の心を抱いて、翌朝に鳩を放してやる、という寓話が挿入されていたり、「至徳を備えているので感情

を抑制し、いつも相談して争わない」と、ハヤブサが人間と同じ性質を持っているかのような表現が見られる。『太平広記』巻四六〇引『朝野僉載』

8. 高邁「鯢化為鵬賦」(卷二七六)

鯢が大鵬に変化して、天高く飛翔する話の中に、「張皇聞見、卓犖今古。」(張皇たる聞見は、今古に卓犖す)など、大鵬が人間と同じ性質を持っているかのような表現が見られる。終わり近くで、大なる者と小なる者が遠く隔たっているのは、人間社会でも同じだ、との寓意が述べられる。『莊子』逍遙遊篇)

9. 李華「鶚執狐記」(卷三一六)

作者が、鶚が狐を襲っているところに出くわし、人間も心を清らかにして悪意を除かないと、狐と同じ目に遭う、と戒める。(鶚は『漢書』鄒陽伝等、狐は『戦国策』楚策一等)

10. 李白「大鵬賦」(卷三四七)

大鵬が天空を飛翔するさまを描写し、最後に李白自身が鳥に化して作中に現れ、大鵬とともに飛翔する。『莊子』逍遙遊篇)

11. 郊昴「蚌鷸相持賦」(卷三六一) ○以洛城風日為韻

蚌と鷸が互いに譲らず、最後は両方とも漁師に捕らえられてしまう。『漁夫の利』の話。『戦国策』燕策二)

12. 包佶「罔兩賦」(卷三七〇) ○以道德希夷仁義為韻

罔兩と形の会話を通じて何物にも依存しない境地を述べ、最後にその一端すら得ていない作者自身を恥じる。

『莊子』寓言

13. 元結「虎蛇頌」(卷三八〇)

猗玗子のために自らの場所を明け渡してくれた虎と蛇に対し、「虎は古の君子のようであり、蛇は古の賢士のようだ」と称える。(虎は『戦国策』楚策一等、蛇は『韓非子』説林上等)

14. 蔣至「罔兩賦」(卷四〇七) ○以道德希夷仁義為韻

抽象的な内容で、寓意が明確でない。『莊子』齊物論)

15. 孫鑒「罔兩賦」(卷四三四) ○以道德希夷仁義為韻

科挙の答案。抽象的な内容で、寓意が明確でない。『莊子』齊物論)

16. 李子卿「紅質鳥賦」(卷四五四) ○以新飛羽未調為韻

「孝であり仁である」と、人と同じ性質を持つかのよう描かれている。

17. 陸贄「鴻漸賦」(卷四六〇) ○以鴻漸路適之為韻

科挙の答案。大鵬が発話したかのような書き方がされている。『周易』漸卦爻辞)

以上の検討をふまえ、韓愈より前の唐代動物寓話の特徴を次のようにまとめることができる。

(1) 賦のスタイルで書かれた作品が多い。これは『文選』鳥獸賦の流れをくむもので、この時期の文学が、寓話においても六朝文学の影響を色濃く残していることを示す。また、題下に韻字の指定があるものは、科挙の試験問題である。科挙の試験にも、寓話をふまえた問題が

出題されていたことが分かる。

(2) 取り上げられている動物は、ほとんどが過去の書物に出所を求めることができる。その効果としては、作者と読者が容易にイメージを共有できる反面、斬新さや新鮮さに欠ける。

(3) 散文で書かれているものはわずかで、ほとんどが対句主体の文章で書かれている。

(4) 一部の作品は先秦寓話のスタイルを継承し、寓意も鮮明であるが、多くは本文の一部に寓意を託した記述を含む形で、寓意性も弱い。これは賦という文体と関係がある。

二 柳宗元の動物寓話

本章では、柳宗元の動物寓話について検討し、さらに第一章で検討した韓愈より前の寓話との比較を行い、その共通点・相違点を明らかにする。

柳宗元の寓話については、山本昭「柳文札記(一)——動物寓言について——」、松本肇「柳宗元の寓言について——敗北の逆説」の二論文に詳しい論考があるが、作品内容の分析を主としたものであり、それ以前の動物寓話との比較検討や、寓話史における位置づけという視点では論じられていない。

本論では、第一章と同様の方法で検討を加え、両者を比較検討して、柳宗元の動物寓話の特徴を浮き彫りにしたい。

本論で対象となるは、次の作品である。^①

1. 「牛賦」(巻二)
2. 「鶴説」(巻一六)
3. 「飛説」(巻一六)
4. 「蝻蟻伝」(巻一七)
5. 「罵尸虫文」(巻一八)
6. 「有蝮蛇文」(巻一八)
7. 「憎王孫文」(巻一八)
8. 「逐畢方文」(巻一八)
9. 「怨螭文」(巻一八)
10. 「三戒」(巻一九)
11. 「東海若」(巻二〇)

題名を見ると、賦が一篇のみで、それ以前と比べて大きく様変わりしていることがわかる。また「○○文」という作品が五篇あり、約半分を占める。この五篇は、『柳宗元集』ではすべて騷の部に属する。どの作品にも強い感情が表出されており、『楚辞』の流れをくむ作品になっている。

取り上げられる動物も、以前には見られないものばかりであり、新しい題材を積極的に取り込んで寓話を作っていることが分かる。

たとえば蝻蟻は、『爾雅』釈虫に「負版」と見えるが、郭璞注は「未詳」とし、生態等は不明である。柳宗元は

これを寓話の題材として初めて取り上げただけでなく、初めてその生態を記し、そこに寓意を込めた。『爾雅』の記述をふまえて「蝻蟻伝」を創作したのではなく、意図的にオリジナルの寓話を作り出しているのである。そのため読者は、題材の新鮮さとともに、いったい蝻蟻の何をどう論じるのだろうか、という興味をそられながら作品を読み進めることになる。そして寓意を述べる段に至って、なるほど、膝を打ったのではないだろうか。

尸虫もまた、ことばとしては『史記』斉太公世家等に見えるが、「罵尸虫文」は、柳宗元が道士から聞いた話が発端となっており、『史記』をふまえず、「現在」の話として創作されている。

同様に、「有蝮蛇文」は、召使いが捕まえてきたマムシをめぐる柳宗元と召使いの間答で、「現在」が舞台になっており、過去の書物をふまえた書き方をしていない。

「三戒」に登場するのは、「臨江之麋」、「黔之驢」、「永某氏之鼠」であり、動物に地名を付すことで、いかにも現代の話のように語られる。このように、柳宗元の動物寓話は、「現在」に対する意識が非常に強い。これは柳宗元が現実には大きな関心を抱いていることの反映であり、現実を凝視する中から生まれた、柳宗元の動物寓話の最大の特徴ではないだろうか。

続いて文体について見ると、賦は当然対句を主体とする。説と伝は散文で書かれており、「鶻説」に出てくる柳宗元の発話の部分で反覆が多用されている。「文」は騷体

で、対句中心に書かれ、序の部分は散文である。「三戒」、「東海若」は全篇が散文で書かれている。すなわち賦や騷といった定型の文体以外は散文で書かれており、古文運動の眼目の一つである、内容と文体の一致を目指した文体になっている。

最後に構成だが、寓話と主張が明確に分かれていることが指摘できる。そのため、作者の主張がストレートに伝わってくる。

また、柳宗元の動物寓話は、寓話のあとに作者が意見を述べるという、『戦国策』型がほとんどで、寓話のみを記して寓意を読者に想像させるという『莊子』型はほとんど見られない。ここには多様な解釈の可能性を排除し、自分の主張をありのままに伝えようとする柳宗元の姿が見える。

以上の検討をふまえ、韓愈より前と柳宗元の動物寓話の相違点として、次の点が指摘できる。

(1) 韓愈より前は、一人の作者が多くても二篇の動物寓話しか書いていなかったが、柳宗元は一人で十篇以上の動物寓話を書いている。

(2) 韓愈より前は、賦で書かれたものがほとんどだったのに対し、柳宗元は、約半分が騷体の「文」である。

散体の作品が増えたことは古文運動と関わりがあり、騷体が多いのは、強い感情の吐露に適した文体だったからであろう。

(3) 柳宗元によって新たに取り上げられた動物が多い。

中国の寓話に出てくる動物は、その性質がよく生かされている。動物が増えることは、寓話の表現の幅を増すとともに、読者には新鮮味と、ストーリー展開への期待感を抱かせただろう。

(4) 柳宗元には、作品の舞台を明確に現代と定めたものが多い。これは、現実に関心をもち続けた柳宗元の精神の反映である。

(5) 作品構成面では、柳宗元の寓話は、寓話と主張が明確に分かれており、言いたいことがストレートに伝わってくる。先秦寓話のスタイルに回帰していると言える。

このように、韓愈より前と柳宗元の動物寓話は、さまざまな点で大きく異なる。ここで当然、柳宗元は、このような新しいスタイルの動物寓話を突然書き始めたのか、という疑問が生じる。

従来の研究では、唐代寓話の代表として柳宗元を挙げることが、それに先行する作品については数篇に言及するのみで、先行する作品との比較検討が不十分であり、この疑問に答えることができていない。

本論では、中国寓話史でこれまで重視されることがなかった、唐代古文運動のもう一方の雄である韓愈に着目し、実は韓愈こそが唐代動物寓話の流れを変える突破口であり、柳宗元の動物寓話を生み出す起爆剤となったことを、章を改めて論じる。

三 韓愈の再評価

従来の中国寓話史において、韓愈に対する評価は決して高いとは言えない。たとえば陳蒲清氏は、「韓愈在寓言創作方面的成績是不大的。」（韓愈の寓言創作における業績は大きくない）と指摘する。また韓愈の寓話作品としては、「毛穎伝」、「雜説四首」其一・其四などが指摘されるに過ぎない。

しかし韓愈は、寓言創作においても大きな足跡を残しているのであり、韓愈こそが柳宗元とそれ以前とをつなぐ重要な位置を占めているのである。

韓愈に「猫相乳」という作品がある。この作品は、韓愈が科挙受験のため長安に滞在していた時に、経済的援助を受けた司徒北平王・馬燧の人徳を称えるために書かれたものである。

この作品は三段に分けられ、まず馬燧の家で起きた奇異なできごとから説き起こされる。

司徒北平王家、猫有生子同日者、其一死焉。有二子飲於死母。母且死、其鳴啾啾。其一方乳其子、若聞之、起而若聽之、走而若救之、銜其一置于其棲、又往如之、反而乳之若其子然。噫、亦異之大者也。（司徒北平王の家に、猫の子を同日に産む者有りて、其の一死す。二子有りて死母に飲む。母且に死せんとして、其の鳴くこと啾啾たり。其の一方に其の子に乳するときに、之を聞くが若く、起ちて之を聴くが若く、走りて之を救ふが若く、其の一を銜みて其

の棲に置き、又た往きて之の如くして、反りて之に乳すること、其の子の若く然り。噫、亦た異の大なる者なり。」

司徒北平王の家で、二匹の猫が同じ日に子を産んだが、うち一匹の親猫が死んだ。残された二匹の子猫は、死んだ親猫の乳を飲んでミームー鳴いている。するともう一方の親猫が、その声が聞こえたようで、相手の巢に走って行き、子猫を口にくわえて戻り、自分の子と同じように乳を飲ませてやった。なんと珍しいことではないか。第二段落は、このできごとをふまえた韓愈の主張である。韓愈は次のように言う。

夫猫、人畜也。非性於仁義者也。其感於所畜者乎哉。……『易』曰、「信及豚魚」、非此類也夫。（夫れ猫は、人に畜はるる者なり。仁義を性とする者に非ざるなり。其れ畜ふ所の者に感ずるか。……『易』に曰く、「信、豚魚に及ぶ」と。此の類に非ずや。）

猫は、人に飼われるものである。生まれながらに仁義の性質を備えているわけではない。これは飼い主に感化されたのだろうか。……『周易』に、「真心が豚や魚にまで及ぶ」というのは、まさにこのことではないか。

猫の慈愛ある行動を、飼い主に感化された結果とすることで、馬燧の人徳を称えている。

第三段落は、韓愈が制作動機を述べて作品を終える。この作品は、次の特徴が指摘できる。

(1) 寓話のくだりと作者の主張が明確に分かれており、そのため主張も明確である。

(2) 猫という、中唐以前の動物寓話には用いられなかった新しい題材を用いている。

(3) 第一段は、小説を大胆に取り込んでいる。同時に『莊子』の典故を盛り込むことで、俗に流れすぎないようバランスが取られている。

(4) 卑近な動物の卑近な出来事をもとに寓話を作っている。大鵬が北溟に向かって飛翔するようなスケールの大きさも虚構性もないが、卑近だけに、イメージを喚起する力は強い。

これらの特徴のうち、(1)、(2)は、韓愈より前の動物寓話と一線を画し、柳宗元の先駆けとなっている。

(4)は、特徴(2)からもたらされる効果である。(3)は、題材の可能性を大きく広げたものの、典故を盛り込むなど知識人が書く文章に近づけようとの意識が窺え、伝統の枠を脱しきっていない一面がある。これに対し、柳宗元は寓話にこのような要素を加えていない。柳宗元の動物寓話は、韓愈の試みを、さらに一歩進めたものと見ることができ、動物の動きを、動きとして十分に書き上げたのが、柳宗元だったと言える。

「猫相乳」は、中国の先行研究ではまったく取り上げられず、日本でも肯定的に言及されてこなかった。中国

で取り上げられなかった理由は、この作品が万人に共通する教訓や道徳を述べておらず、一個人の人徳を称えた文章として書かれたためと思われる。しかし、さきほど指摘した特徴を見ても分かるように、寓話としての特徴を十分に備えており、中国寓話史を考える上で決して見逃してはならない作品なのである。

では、なぜ韓愈はこのような作品を作ったのだろうか。その理由を、「雜説四首」⁽¹⁰⁾其三に窺うことが出来る。

談生之為「崔山君伝」、称鶴言者、豈不怪哉。然吾觀於人、其能尽其性而不類於禽獸異物者希矣。將憤世嫉邪、長往而不來者之所為乎。……怪神之事、孔子之徒不言。余將特取其憤世嫉邪而作之、故題之云爾。

（談生の「崔山君伝」を為るに、鶴ももの言ふと称する者、豈に怪しからずや。然れども吾人を觀るに、其の能く其の性を尽くして禽獸・異物に類せざる者は希なり。將た世を憤り邪を嫉み、長く往きて来たらざる者の為る所か。……怪神の事、孔子の徒は言はず。余將に特に其の世を憤り邪を嫉みて之を作らんとするを取り、故に之に題すと爾云ふ。）

談生が「崔山君伝」を作り、鶴が人のことばを話すというのは、何と不思議なことではないか。しかし、世間の人々を見るに、その持ち前を尽くして禽獸に類さない者は少ない。世の中に対して憤り、邪惡を憎み、世を棄

てて戻らない者が作ったのだろうか。……怪力乱神のことは、孔子の徒は語るべきではない。しかし私は特に、その世を憤り邪惡を憎んで作った点を評価して、ここに書きつける。

韓愈はここで、自ら孔子の徒を標榜し、怪力乱神を語るべきでないことわりながら、「崔山君伝」が世の中に對して憤り、邪惡を憎んでいる点を評価して、わざわざこの文章を書いている。この姿勢は、伝えるべき内容があれば、たとえ怪異な話であっても、それを取り入れることを辞さない創作態度につながる。

韓愈のこの考え方は自分自身の作品にも反映されている。たとえば「送窮文」⁽¹¹⁾の中に自己の分身としての貧乏神を登場させ、それと会話する形で、自己のありようを確認している。また韓愈の高弟の一人である李翱は、動物寓話「国馬説」⁽¹²⁾を書いており、韓愈の創作態度が弟子にも及んでいることが分かる。

また、従来の寓言研究においてしばしば取り上げられる、筆を擬人化してその一生をつづった伝記「毛穎伝」⁽¹³⁾について、柳宗元は世間の風潮に反して「読韓愈所著毛穎伝後題」⁽¹⁴⁾を書いて、韓愈を擁護したことがある。

柳宗元が動物寓話を作ったとき、すでに「毛穎伝」を見ていたかどうかは分からないが、少なくとも「猫相乳」や、「雜説四首」⁽¹⁵⁾其三に見える韓愈の創作態度が、意識の中にあったのではないだろうか。柳宗元の動物寓話は、決して突然現れたのではなく、韓愈という存在が、柳宗

元の寓話を生み出す先駆的な役割を果たしているのであり、中国寓話史における韓愈の評価は見直されなければならないのである。¹³⁾

おわりに

本論では、中国寓話史において、唐代寓話の代表人物が柳宗元であることは共通して指摘されるものの、それ以前の寓話についての検証が不十分であるとの指摘を行ない、まずはじめに韓愈より前の唐代動物寓話を取り上げ、先秦の動物寓話との比較を通して、その特徴を明らかにした。このような作業はこれまでされたことがなく、多くの作品を中国寓話史で初めて取り上げた。その結果、典型的な寓話として「無心子伝」、「窮魚賦」、「猩猩銘」の三篇を示すとともに、この時期の動物寓話の特徴として、賦のスタイルで書かれた作品が多いこと、取り上げられている動物は、ほとんどが過去の書物に出所を求めることができること、ほとんどが対句主体の文章で書かれていること、先秦寓話のスタイルを継承した作品はわずかしかなこと、を指摘した。

次に柳宗元の動物寓話について検討し、その特徴を確認するとともに、韓愈より前の動物寓話との比較を行い、両者の相違点として、柳宗元は、一人で数多くの動物寓話を書いていること、賦の作品は一篇のみで、騷体の作品が多いこと、柳宗元によって新たに取り上げられた動物が多いこと、柳宗元の作品には、舞台を明確に現代と

定めたものが多いこと、作品構成において、先秦寓話のスタイルに回帰していることを指摘した。

そして最後に、唐代古文運動のもう一方の雄であり、「韓柳」と並び称される韓愈の作品から、寓話史において従来評価されることのなかった「猫相乳」、「雜說四首」其四などの作品を取り上げ、韓愈こそが唐代動物寓話の流れを変える突破口であり、柳宗元の動物寓話を生み出す起爆剤となっていたことを指摘し、中国寓話史における韓愈の再評価を提起した。

本論では、先秦寓話に適宜言及しながら、唐初から韓柳までを論述の対象とした。今後は唐初の状態をもたらした要因を解明するため、先秦から唐初に至るまでの、六朝時代を中心とする時代の状況を明らかにする必要がある。そこには小説や、仏教寓話も関係してくる。今後もし引き続き、動物寓話を中心として、時期を広げ、さらには寓話全体をも視野に入れて研究を続けていきたい。

注

(1) 唐代寓話について論じた先行研究には、次のものがある。

一、書籍

胡懷琛『中国寓言研究』商務印書館 一九三〇

段醒民『柳子厚寓言文学探微』天津出版社 一九八五再版

※初版の発行年は、序文等から一九七九年頃と思われる。

陳蒲清『中国古代寓言史』湖南教育出版社 一九八三

吳秋林『寓言文学概論』遼寧少年兒童出版社 一九九一

邵伝烈『中国雑文史』上海文芸出版社 一九九一

凝溪『中国寓言文学史』雲南人民出版社 一九九二

吳秋林『中国寓言史』福建教育出版社 一九九九

二、論文

鄭振鐸「寓言的復興」(『中国文学研究 下』)

清水潔「中国に於ける寓言―特に動物寓言について」(『研究

集録 人文・社会科学』10 一九六二)

山本昭「柳文札記(二)―動物寓言について―」(『小尾博士

退休記念中国文学論集』第一学習社 一九七六)

松本肇「柳宗元の寓言について―敗北の逆説」(『筑波中国文

化論叢』1 一九八一、『柳宗元研究』創文社 二〇〇〇)

星野忠国「略論中国寓言」(『東海大学紀要 外国語教育セン

ター』10 一九八九)

右記の書籍で言及されている柳宗元以前の唐代寓話は、動物
以外のものも含め、次の通りである。

胡懷琛『中国寓言研究』…無し

陳蒲清『中国古代寓言史』…寓話として、元結「乞論」、「化

虎論」、「惡円」、韓愈「毛穎伝」、「圻者王承福伝」。寓言

的色彩を帯びた雑文として、韓愈「応科目時与人書」、「送

窮文」、「竜説」、「馬説」、「祭鰲魚文」

邵伝烈『中国雑文史』…盧照鄰「窮魚賦」、蕭穎士「伐桎桃樹

賦」、元結「丐論」、杜甫「説旱」、韓愈「雜説」四篇、「毛

穎伝」

凝溪『中国寓言文学史』…張彦遠「画竜点睛」(『歴代名画記』)

吳秋林『中国寓言史』…王績「五斗先生伝」、張鷟「執『馬経』

以求馬」(『朝野僉載』)、裴炎「猩猩名」、韓愈「毛穎伝」、

「馬説」

(2) この作品では、大鵬がことばを発している点が注目される。唐代寓話では、先秦寓話よりも、異類がことばを発することが少ない。さらに、大鵬は先秦寓話ではことばを発しなかったものであり、本作品以前に大鵬がことばを発した例があるのか、調べてみる必要がある。

(3) 注(1) 参照。

(4) テキストは、『柳宗元集』(中華書局 一九七九)を用いた。

(5) 注(1) 参照。

(6) 『中国古代寓言史』一七六頁。

(7) 『昌黎先生集』卷一四。巻数は通行本により、テキストと
繁年は『韓愈全集校注』(四川大学出版社 二〇〇〇)によ
る。以下同じ。

(8) 猫のエピソードは、『朝野僉載』「王燧」(『太平広記』卷
二三八「詭詐」)の次の記述をふまえる。

河東孝子王燧家、猫犬互乳其子。州県上言、遂蒙旌表。

乃是猫犬同時産子、取猫兒置犬窠中、取犬子置猫窠内、飲慣

其乳、遂以為常。殆不可以異論也。(河東の孝子王燧の家に、

猫犬互ひに其の子に乳す。州県言を^{たてまつ}上り、遂に旌表を蒙

る。乃ち是れ猫犬時を同じくして子を産み、猫兒を取りて

犬窠中に置き、犬子を取りて猫窠内に置き、其の乳を飲み慣

らしめて、遂に以て常と為す。殆ど以て論を異にすべからざ
るなり。)

子猫が死んだ親猫の乳を飲む場面は、『莊子』徳充符篇に、「仲尼曰、丘也嘗使於楚矣。適見豚子食於其死母者。」（仲尼曰く、丘や嘗て楚に使ひせり。適たま豚子の其の死母に食む者を見たり）とあるのをふまえている。これらの点については、拙論「韓愈の古文―虚構と創作意識」（『中国中世文学研究』58 二〇一〇）ですでに指摘したことがある。

(9) 前掲注(1)に掲げた先行研究の中で、清水潔氏は、「これは事実のニュースが極めて珍しいことであり、又感ずべきことであったために取り上げたことであって、意識的に寓言として書いたような作品では無い。」と指摘し、山本昭氏は、「韓愈の動物寓言的散文の代表的なもの」として「雉説」一・四と「獲麟解」を挙げた後に、「動物に題材を取った散文」として「猫相乳」に言及し、「韓愈の人と文学のもっている俗物的な一面がくみ取れる作品である」、「『猫相乳』には、諷墓辞に近いものが感ぜられる。」と指摘している。

(10) 『昌黎先生集』巻一一

(11) 『昌黎先生集』巻三六

(12) 『李文公集』巻五

(13) 『昌黎先生集』巻三六

(14) 『柳宗元集』巻二一

(15) 動物寓話ではないが、韓愈はさらに、「答陳商書」（『昌黎先生集』巻一八）において、齊の宣王の故事（『韓非子』内儲説上などに見える）をふまえた寓話を創作している。これについて清・張裕釗は「似『国策』得其機趣。」（『国策』に似、其の機趣を得）と『戦国策』との類似を指摘し（『韓昌

黎文集校注』より引用）、清水茂は『韓非子』（中略）から思いついた寓話であろうか。（『韓愈I』筑摩書房 一九八六）と述べている。

この作品は元和七年（八一二）に繁年されており、柳宗元の動物寓話と創作時期の前後は不明である。先行研究ではまったく言及されていないが、中国寓話史において決して見落としてはならない作品である。